

認識のモダリティ形式「ミタイ(ダ)」について

—視点の観点から—

國澤里美

1. はじめに

従来、話し手が自分自身の感情・感覚について述べる場合、ミタイ(ダ)やカモシレナイのような「認識のモダリティ」形式を使わなくても表現できると考えられてきた。これは、話し手の感情・感覚という命題内容は真であるとみなされることが多いためだと考えられる。しかし、若い世代を中心に、「(話し手の感情を述べる場面で)好きみたい」、「(料理を食べて)おいしいかも」などのようなモダリティ形式の使用が観察される。

佐竹(1997)が指摘するように、いわゆる「若者ことば」が作られる状況や、それが使われる用法に何らかの普遍性ないしは共通の傾向が認められれば、それは次世代の日本語のありようを左右する可能性を多いに含んでいると考えられる。

本稿は、「認識に関わる言語形式」の変化に関する研究の一環として、「認識のモダリティ」形式の1つであるミタイ(ダ)について、「視点」の観点から考察する。¹

2. 先行研究

2.1 ミタイ(ダ)とヨウダ

寺村(1984)や三宅(1994)でも述べられているように、「見たようだ」→「みたようだ」→「みたいだ」という歴史的な派生から考えて、ミタイ(ダ)はヨウダとほぼ同義であると認められることが多い。寺村(1984:242)は、ミタイ(ダ)についてヨウダに比べて「口語的で

¹「まるで～のようだ」、「～のような…」などの形式をとる<比況>、<例示>と言われる用法については、本稿の考察の対象外とする。

國澤里美

だけた感じがあり、文末でダが省かれる甘えた響きの用法もある」と述べ、具体的な考察はヨウダに絞っている。三宅(1994:23)も、ミタイ(ダ)は「文体的なニュアンスを除けばヨウダとほぼ同義であると言える」と述べているが、統語的な違いは認めている。それは、(1)のようにヨウダは条件節の内部に入ることができるが、ミタイ(ダ)はできないという点である。

- (1) わからない{ようだったら/*みたいだったら}聞きなさい。

(下線部及びひらがな表記は筆者による)

日本語記述文法研究会(2003:167)は、ミタイ(ダ)はヨウダと「ほぼ同じ意味を表す」としながらも、接続と形、用法、文体についての違いを指摘している。² 接続の違いとして挙げているのは次の2点である。1点目は、(2)や(3)のようなナ形容詞・名詞との接続の仕方の違いである。2点目は、(4)のような「～かの+ようだ」という接続の仕方がミタイ(ダ)にはないという点である。

- (2) このあたりは{静かなようだ/静かみたいだ}。

(下線部は筆者による。以下同様)

- (3) 東京は{雨のようだ/雨みたいだ}。

- (4) この店の雰囲気は、まるで外国にいるかの{ようだ/*みたいだ}。

形の違いとして挙げられているのは、(5)のようにミタイ(ダ)は「だ」が落ちることがあるが、ヨウダは「よう」で言い切ることができないという点である。

- (5) 斉藤君、就職の内定もらった{*よう/みたい}。

そして、文体の違いについては、話しことばではヨウダよりもミタイ(ダ)が用いられることが多く、逆に、かたい文体の文章ではヨウダを用いるのが普通であると述べられている。

先行研究では、ミタイ(ダ)はヨウダの会話体とみなされ、ミタイ(ダ)に着目するというよりもヨウダを考察する中で派生的な形式として触れられることが多かった。

本稿では、会話場面に統一し、話し手と聞き手が同じ場に存在するという同じ条件のもとで考察するため、ヨウダではなくミタイ(ダ)という形式を取り上げる。また、会話場面では「ダ」が落ちる傾向が観察されるため、例文判定にはミタイという形式を用いた。しか

² 用法の違いとして、「芸能人が着る{ような/*みたいな}服がほしい。」という例を挙げ、ヨウダに見られる連体形の<比況>用法は、ミタイ(ダ)では許容されないことがあると述べている。

し、ミタイ(ダ)に関する先行研究が数少ないこと、ミタイ(ダ)という形式の成立にヨウダが関与していること、ミタイ(ダ)とヨウダの意味がかなり近いということを踏まえ、まずヨウダの先行研究を概観する。

2.2 ヨウダの意味用法

ヨウダについての先行研究は数多いが、話し手の認識に関わる「認識のモダリティ」形式の1つであるという位置づけは多くの先行研究に共通している。ヨウダをめぐるのは、ラシイとの比較を中心に様々な論があるが、<推量>と言われる用法に限定せず、ヨウダの意味用法について述べている小野澤(2008)を参考に、本稿におけるヨウダの意味用法を示す。

ヨウダには、①「観察(体験)して捉えた様子を表す」用法と、②「観察(体験)して捉えた状況を証拠として推測を加えた結果、そうと判断される別の事態の成立を述べる」用法(例文8)がある。①はさらに「観察(体験)して捉えた様子そのものを描写する」もの(例文6)と、「観察(体験)して捉えたことに基づいて判断した様子を述べる」もの(例文7)に下位分類される。

- (6) 二年ぶりに父と会った。短めの髪には白髪が交じり、顔には皺が増えたようだ。
(小野澤 2008)
- (7) 今まで繰り返し説明してきたのに、この人はどうやら、何をすべきか全然分かっていないようだ。
(小野澤2008)
- (8) 山田先生が研究室の鍵を掛けていらっしやる。どうやら先生は授業に行かれる{らしい/ようだ}。
(小野澤2008)

これらの用法は全て「観察(体験)して捉えた」という共通点があり、それが用法と用法に連続性を持たせていると考えられる。

2.3 <婉曲>の定義

ヨウダの用法としては、<比況>、<推量>と言われる用法が指摘されることが多いが、丹保(1999)などのようにヨウダの用法の1つとして<婉曲>を認めるものもある。また、ヨウダの<婉曲>用法に着目したものとしては、黄(2004)や山本(2008)があり、特に聞き手の領域の観点から考察を行っている。

國澤里美

婉曲について、柏岡(1980:170)は『『婉曲』な断定は、話者にとって確実な判断が存在することを前提とし、それを不確実であるかのように表現するという二重構造を持っている。一方『推量』は判断自体が話者にとって不確実なものであり、表現と一致している』と述べている。また、菊池(2000:48)は『『確実かどうか、はっきりとはわからない』という気持ちである場合ヨウダを使い、これが断定する表現との違いである。確実だと思ってもあえてヨウダを付すとすれば、それはいわゆる<婉曲>用法である』と述べている。

本稿では、婉曲を「命題内容が真であることが明らかであるのに、「認識のモダリティ」形式を用いて命題内容が不確実であるかのように表現する」用法であると定義する。しかし、仁田(1992)の指摘にもあるように、<婉曲>と<推量>など、用法間の連続性も認める。

3. 本稿の仮説

本稿は、「若い世代は上の世代に比べて、話し手が自分自身を観察対象とする傾向があるため、話し手自身の感情・感覚について述べる場合にもミタイ(ダ)が使われる」という仮説をもとに、「視座」と「注視点」の観点からミタイ(ダ)を考察する。

3.1 視座と注視点

本稿における「視座」と「注視点」を定義するために、まず「視点」に関する先行研究を概観する。「視点」という概念を積極的に導入したものとして、大江(1975)や久野(1978)が挙げられるが、両者は視点を「どこから見ているか」という意味で捉えており、これは本稿での「視座」に当たる。また、久野は「カメラ・アングル」にたとえた「視点(本稿における『視座』)」についてその移動を認め、対象人物に最も近づけた状態を「同化」、「自己同一化」(Identification)と呼び、「共感(Empathy)度」という概念を導入した。佐伯(1978)は、対象をながめる位置である「視座」と、見られる対象である「注視点」を区別し、茂呂(1985)は、さらに「視点人物(だれが見るのか)」と「見え(見たこと)」という2つの要素を認めた。

本稿も、「視点」には「視点人物」、「視座」、「注視点」、「見え」の4つの要素があると考え、これらを区別する。それらは、「だれが見るのか」の<だれ>、「どこから見ているのか」の<どこ>、「どこを見ているのか」の<どこ>、「見えたこと」、である。

3.2 「視座」の移動と「注視点」の移動

久野(1978)は「視座」の移動について指摘しているが、「注視点」の移動も考えられる。池上(2005:16)は、認知言語学の立場から「自己の客体化」について次のように述べている。

鏡に映った他者の姿がその他者本人であると確認できるのと同じように、鏡に映った自己の姿は他ならぬ自己の客体化されたものという認識が出来上がれば、(略)客体化された自己を他者と見做し、自己が自己に働きかけるという認知的な構図も十分可能になる。

これを「視点」の観点から説明すると、「視座」は発話時現在における話し手であり、「注視点」は鏡に映った話し手自身の姿である。すなわち、話し手は鏡に映った自分の姿を、自分から切り離して観察対象としており、「注視点」が移動していると考えられる。

本稿では、若い世代は話し手自身の感情・感覚を述べる場合、「視座」と「注視点」を切り離して観察(体験)して捉えたこととして表現する傾向にあるため、上の世代に比べてミタイ(ダ)の許容度が高くなると予想する。

4. ミタイ(ダ)の使い方に見られた世代差

日本語母語話者がミタイ(ダ)をどのように意識しているかを知るためにアンケート調査を行った。アンケートの例文は全て筆者の作例で、全て友達に対する発話場面である。それぞれの場面においてミタイが言えるかどうかを判断してもらい、言えると思うものには○、言えないと思うものには×、判断に迷うものには△を書いてもらった。³ アンケート協力者は高知県在住(2008年9月)の156名で、有効回答数は153であった。10代33名、20代30名、30代30名、40代30名、50代以上30名(50代16名、60代14名)である。⁴

³ 会話場面ではミタイダの「ダ」が落ちる傾向が観察されるため、例文判定にもミタイという形式を用いた。

⁴ 調査協力者の内訳は以下のとおりである。

10代…33名(男15/女18)、高知県出身32名/県外出身1名(広島県)高校生限定
20代…30名(男8/女22)、高知県出身28名/県外出身2名(愛媛県、福岡県)、社会人限定
30代…30名(男5/女25)、高知県出身25名/県外出身5名(千葉県2、埼玉県1、奈良県1、香川県1)
40代…30名(男5/女25)、高知県出身26名/県外出身4名(愛媛県3、熊本県1)
50代以上(50代16名/60代14名)
…30名(男8/女22)、高知県出身27名/県外出身3名(京都府、愛媛県、宮崎県)

國澤里美

4.1 ミタイ(ダ)が使われやすい場合

話し手にとって命題内容が不確実な場合にはミタイ(ダ)が使われやすい。(9)が言えると判断したのは153人中147人(96.1%)で、(10)は136人(88.9%)、(11)は133人(86.9%)が言えると判断した。観察対象はそれぞれ「車のエンジン音」、「記憶のない過去の話し手自身」、「発話場面にいない第三者」である。

- (9) 場面:AとBは家の中でタクシーを待っています。Aは車のエンジン音を聞きました。

A「<Bへの言葉>タクシーが来たみたい。」

(全体:○96.1%、△0.7%、×3.3%)

- (10) 場面:Aは自分では記憶がない子供のときのエピソードを親から聞いたばかりです。

A「<Bへの言葉>A自身について>恥ずかしがり屋だったみたい。」

(全体:○88.9%、△3.3%、×7.8%)

- (11) 場面:AはCについて話しています。(CにはAとBの会話の内容は聞こえません。)

A「<Bへの言葉>Cについて>心配りができる人が好きみたい。」

(全体:○86.9%、△8.5%、×4.6%)

(9)は直接車を確認したわけではないため、命題内容は不確実であると言える。(10)は話し手自身の性格についてであるが、記憶がないため命題内容は不確実であり、(11)は第三者の好みについての命題内容であるため不確実である。

(9)、(10)、(11)はどの世代でも使われやすいと判断されたが、50代以上は他の世代に比べると許容度が低い。50代以上で(9)が言えると判断したのは83.3%、(10)は80.0%、(11)は70.0%であった。50代以上における許容度の低さはアンケート全体の傾向として表れたが、その理由として50代以上ではミタイ(ダ)という形式そのものの使用が多くないためだと考えられる。

4.2 命題内容が真であるのにミタイ(ダ)が使われる場合

(9)のように命題内容が不確実な場合、ミタイ(ダ)は使われやすいが、命題内容が真である場合でも、その情報を伝達すること自体に価値があると考えられる場合には許容

度が上がる。

- (12) 場面:AとBは家の外でタクシーを待っています。2人は待っていたタクシーが自分たちの方に近づいてくる様子を直接見えています。

A「<Bへの言葉>タクシーが来たみたい。」

(全体:○54.2%、△5.9%、×39.9%)

- (13) 場面:AとBは家の外で話をしています。2人が立っている道は道幅が狭く、そこで話を続けると車の通行に邪魔になるので、車が来たら場所を移動する必要があります。Aは見知らぬタクシーが近づいてくる様子を直接見えています。

A「<Bへの言葉>タクシーが来たみたい。」

(全体:○44.4%、△11.1%、×44.4%)

- (14) 場面:AとBは家の外で話をしています。2人が立っている道は道幅が広く、そこで話を続けても車の通行に邪魔になるとは思えません。Aは見知らぬタクシーが近づいてくる様子を直接見えています。

A「<Bへの言葉>タクシーが来たみたい。」

(全体:○27.5%、△19.0%、×53.6%)

(12)、(13)、(14)はいずれも話し手の目で直接車の接近を確認しており、命題内容は真である。しかし、近づいてきた車を利用する予定である(12)の場合や、車の接近によって自分たちが移動をしなくてはならない状況である(13)においては、観察した結果である命題内容を聞き手に伝達することだけで十分に価値があると考えられる。このため、自分たちの行動を左右しない(14)が言えると判断したのは27.5%であったのに比べ、(12)は54.2%、(13)は44.4%と許容度は上がる。これらはいわゆる<婉曲>用法であり、命題内容が話し手や聞き手の行動に影響する場合であれば許容度が上がることが観察された。

4.3 ミタイ(ダ)が使われにくい場合

話し手自身の感情・感覚を述べる場合、ミタイ(ダ)は使われにくくなる。それは、話し手の感情・感覚についての命題内容は真であると考えられることが多いため、命題内容が不確実であることを表す「認識のモダリティ」形式は用いにくいと判断されるのであろう。(15)が言えないと判断したのは153人中117人(76.5%)であり、(16)は110人(71.9%)、

國澤里美

(17)は105人(68.6%)の人が言えないと判断した。

(15) 場面:AはA自身について話しています。

A「<Bへの言葉。A自身について>今、コーヒーが飲みたいみたい。」
(全体:○11.1%、△12.4%、×76.5%)

(16) 場面:Aは過去のA自身について話しています。

A「<Bへの言葉。A自身について>あとき、キスしたかったみたい。」
(全体:○16.3%、△11.8%、×71.9%)

(17) 場面:AはA自身について話しています。

A「<Bへの言葉。A自身について>心配りができる人が好きみたい。」
(全体:○20.3%、△11.1%、×68.6%)

表1 話し手の感情・感覚について述べる場合

	(15)			(16)			(17)		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×
全体	11.1% (17/153)	12.4% (19/153)	76.5% (117/153)	16.3% (25/153)	11.8% (18/153)	71.9% (110/153)	20.3% (31/153)	11.1% (17/153)	68.6% (105/153)
10代	15.2% (5/33)	6.1% (2/33)	78.8% (26/33)	30.3% (10/33)	18.2% (6/33)	51.5% (17/33)	42.4% (14/33)	9.1% (3/33)	48.5% (16/33)
20代	6.7% (2/30)	16.7% (5/30)	76.7% (23/30)	10.0% (3/30)	3.3% (1/30)	86.7% (26/30)	16.7% (5/30)	10.0% (3/30)	743.3% (22/30)
30代	10.0% (3/30)	13.3% (4/30)	76.7% (23/30)	20.0% (6/30)	16.7% (5/30)	63.3% (19/30)	10.0% (3/30)	10.0% (3/30)	80.0% (24/30)
40代	13.3% (4/30)	6.7% (2/30)	80.0% (24/30)	6.7% (2/30)	6.7% (2/30)	86.7% (26/30)	13.3% (4/30)	10.0% (3/30)	76.7% (23/30)
50代以上	10.0% (3/30)	20.0% (6/30)	70.0% (21/30)	13.3% (4/30)	13.3% (4/30)	73.3% (22/30)	16.7% (5/30)	16.7% (5/30)	66.7% (20/30)

(上段は割合(%)、下段は人数である)

(15)の言いにくさは全世代に共通した傾向として見られるが、(16)と(17)は10代の許容度が他の世代と比べると高いことが特徴的である。若い世代における(16)と(17)の許容度の高さについては次節(4.4)で考察するが、(15)が言いにくい理由として「視座」と「注視点」の一致が考えられる。(15)の命題内容は話し手の感情についてであるが、発話時現在において「話し手である自分」と「観察対象である自分」とを分けて設定するこ

とは困難であり、「視座」と「注視点」を切り離すことは難しいだろう。このため、観察(体験)して捉えたことを表すミタイ(ダ)は用いられにくく、許容度が下がると思われる。

4.4 若い世代に許容されやすいミタイ(ダ)

話し手の感情・感覚を述べる(18)と(19)はアンケート結果全体から見ると許容度は低い。(18)が言えると判断したのは153人中25人(16.3%)で、(19)は31人(20.3%)しかいなかった。しかし、10代では、(18)が言えると判断したのは33人中10人(30.3%)で、(19)が言えると判断したのは14人(42.4%)であり、他の世代より許容度が高いという特徴が表れた。

(18) 場面:Aは過去のA自身について話しています。

A「<Bへの言葉。A自身について>あのとき、キスしたかったみたい。」(=
16) (全体:○16.3%、△11.8%、×71.9%)

(19) 場面:AはA自身について話しています。

A「<Bへの言葉。A自身について>気配りができる人が好きみたい。」(=
17) (全体:○20.3%、△11.1%、×68.6%)

(18)は話し手の過去の感情について、(19)は話し手の好みについて述べている。この2つは話し手自身の感情・感覚について述べており、先行研究では「認識のモダリティ」形式についての考察の対象とされにくかった。これは話し手の感情・感覚を述べる場合、その命題内容は真であると考えられることが多いためであろう。

しかし(20)や(22)のように、命題内容が話し手ではなく、第三者の感情・感覚についてである場合、全世代において許容度が上がる。

(20) 場面:Aは過去に一緒にいた相手(C)について話しています。

A「<Bへの言葉。Cについて>「あのとき、キスしたかったみたい。」
(全体:○71.9%、△10.5%、×17.6%)

(21) 場面:Aは過去のA自身について話しています。

A「<Bへの言葉。A自身について>「あのとき、キスしたかったみたい。」
(=16, 18) (全体:○16.3%、△11.8%、×71.9%)

(22) 場面:AはCについて話しています。(CにはAとBの会話の内容は聞こえませんが、)

國澤里美

A「<Bへの言葉。Cについて>気配りができる人が好きみたい。」(=11)
(全体:○86.9%、△8.5%、×4.6%)

(23) 場面:AはA自身について話しています。

A「<Bへの言葉。A自身について>気配りができる人が好きみたい。」(=
17, 19) (全体:○20.3%、△11.1%、×68.6%)

表2 命題内容の感情・感覚が「話し手のものである場合」と「第三者のものである場合」

	10代			20代			30代			40代			50代以上		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×
(20)	75.8	12.1	12.1	76.7	6.7	16.7	73.3	10.0	16.7	66.7	13.3	20.0	66.7	10.0	23.3
(21)	30.3	18.2	51.5	10.0	3.3	86.7	20.0	16.7	63.3	6.7	6.7	86.7	13.3	13.3	73.3
(22)	90.9	3.0	6.1	90.0	10.0	0	93.3	3.3	3.3	90.0	10.0	0	70.0	16.7	13.3
(23)	42.4	9.1	48.5	16.7	10.0	73.3	10.0	10.0	80.0	13.3	10.0	76.7	16.7	16.7	66.7

(値は割合(%)である)

(20)と(22)の「視座」は話し手、「注視点」は第三者であり、話し手は第三者を観察の対象としている。若い世代は(21)や(23)において、これと同様の解釈をしていると考えられる。すなわち、「視座」と「注視点」を分けて設定し、話し手自身を観察対象としている。この場合、「視座」である話し手と、「注視点」である話し手は別の存在として認識されていると考えられる。(21)は過去の自分自身についての命題内容であり、「視座」と「注視点」を分けて設定することが可能である。(23)は自分自身の好みについての命題内容であるが、過去の自分自身の思考、感情、行動を振り返って観察することが可能である。自分自身についての命題内容であっても観察可能である点が、発話時現在の感情・感覚であるために「視座」と「注視点」が分けられない(15)とは異なる。

(21)と(23)において、「視座」である人物と「注視点」である人物が完全には一致しない場合、許容度は上がるが、その解釈の可能性として次の2つが考えられる。①発話時現在にはいない過去の自分を第三者と同様にみなし、観察対象である「注視点」とする。②「視座」を第三者に置き、発話時現在の自分と過去の自分を観察対象とする。どのような場合に「注視点」の移動が起こり、どのような場合に「視座」の移動が起こるかという移動の条件についても今後、考察する必要がある。

5. まとめ

本稿で考察したミタイ(ダ)について、以下のようにまとめられる。

- ① 命題内容が不確実だと考えられる場合、許容度が高い。
- ② 命題内容が真である場合でも、その情報を伝えることに価値があると考えられる場合には許容度が上がる。
- ③ 話し手自身の感情・感覚を述べる場合、許容度が低い。
- ④ 若い世代では自分自身の感情・感覚を述べる場合であっても、その命題内容が発話時現在のものではない場合は許容度が上がる。これは「視座」と「注視点」を分けて設定することで、話し手自身を観察対象とする傾向があるためだと考えられる。

参考文献

- 池上嘉彦(2005) 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(2)」『認知言語学論考第4巻』ひつじ書房
- 大江三郎(1975) 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂
- 小野澤佳恵(2008) 「小説の会話文と地の文に見られる『ようだ』『らしい』のテンス交替」『国際交流基金日本語教育紀要』4, pp.13-25, 国際交流基金
- 柏岡珠子(1980) 「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』41, pp.169-178, 日本語教育学会
- 菊池康人(2000) 「『ようだ』と『らしい』—『そうだ』『だろう』との比較も含めて—」『国語学』51-1, pp.46-60, 国語学会
- 久野 暉(1978) 『談話の文法』大修館書店
- 黄 鈺涵(2004) 「日本語教育における『ようだ』の婉曲表現としての機能分類について」『早稲田大学日本語教育研究』5, pp.155-167, 早稲田大学
- 佐伯 胖(1978) 『イメージ化による知識と学習』東洋館出版社
- 佐竹秀雄(1997) 「若者ことばと文法」『日本語学』16-4, pp.55-64, 明治書院
- 丹保健一(1999) 「『ようだ』の意味をめぐって—様態、推量、伝聞、婉曲を中心に—」『三重大学教育大学研究紀要 人文・社会科学』50, pp.1-12, 三重大学教育学部

- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
- 仁田義雄(1992) 「判断から発話・伝達へ—伝聞・婉曲の表現を中心に—」『日本語教育』77, pp.1-13, 日本語教育学会
- 日本語記述文法研究会(2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 三宅知宏(1994) 「認識的モダリティにおける実証的判断について」『國語國文』63-11, pp. 20-34, 京都大学文学部
- 茂呂雄二(1985) 「児童の作文と視点」『日本語学』4-12, pp.51-60, 明治書院
- 山本沙枝(2008) 「婉曲『ようだ』と聞き手の領域」『国文目白』47, pp.1-12, 日本女子大学国語国文学会